

2022年度 放課後等デイサービス 恵の実「ステップくん」事業報告書

1 理念

一人ひとりの意欲を大切に、たくましく、かしこく、優しく育つことを願いながら、発達に弱さを持つ子どもも含め、0歳児から学童、大人まで共に育ち合う共同の子育てを目指します。

2 療育目標

- ① 子どもにとっても、保護者にとっても事業所が安心できる場所であり、信頼できる場所となるよう努める。
- ② 恵の実っ子クラブと連携した交流活動の中で、子ども同士の関わり合い、育ち合いを大切にし、“人が大好き”という土台を豊かに育てていく。
- ③ 仲間と共に様々な体験をしながら、人としても心の豊かさを育てる。
- ④ どんなに障がいが高くとも、人間の育つ道筋は同じである。一人一人の発達に合わせて、ゆっくり丁寧に積み上げていく。
- ⑤ 職員と保護者が共に子どもの育ちを考えていけるよう、保護者の想いを共有し合う機会や保護者が学ぶ機会を設け家族支援を行う。

3 職員体制

管理者	1名
児童発達支援管理責任者	1名
保育士	6名（うち、非常勤 4名）
事務員	1名

*管理者、保育士、事務員については他事業所との兼務あり

4 2022年度利用実績

- ・登録者人数 22名 他事業所を併用している児童 8名
- ・定員 20名
- ・利用実績

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
開所日	19	20	22	21	22	21	21	22	20	20	19	23	20.8
延べ利用者数	284	289	324	306	283	312	310	301	310	281	293	354	303.9
日平均	14.9	14.5	14.7	14.6	12.9	14.9	14.8	13.7	15.5	14.1	15.4	15.4	14.6
コロナ感染状況				児1	児3 職1	児1			職1	児2			

5 児童の処遇について

(健康管理)

- ・年に1回のアセスメントの実施。

- ・個々の健康状態、生活リズム、学校での様子、保護者の精神状態をその都度把握し、その上で、支援の方向性の検討を行っている。
- ・新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、毎日の検温、体調把握に努めた。施設の衛生、保育室内の換気を徹底し、体調が気になる子は個室での個別対応をし、様子観察をした上で保護者に早めに引き渡しができるよう対応した。新型コロナウイルス感染症の陽性者は確認されたが、事業所内で感染が拡大することはなかった。
- ・緊急時に備えて、職員の普通救命講習を行った。

(療育内容)

- ・アセスメントを基に個々の課題に応じて個別支援計画を作成し、定期的に個別面談を行い支援計画の見直しを行なっている。
- ・学校への送迎サービスだけでなく、家庭や本人の事情に合わせて自宅への送迎サービスを行うことで、事業所の利用のしやすさにつなげてきた。
- ・学校での難しさがある児童については、相談支援事業所を中心に、学校、他に利用している福祉機関や保護者と連携を取り合い、本人の困り感が少しでも軽減していくよう情報共有をしたり、事業所としてできる役割を果たしてきた。

・生活の基盤

利用者の人数も増え、年齢や性格、体格などの差が大きくなり、不安な様子を見せる利用者の姿がでてきた。そのため、活動する際にグループ分けをしたり、利用者の状況に応じて個別対応をする、活動場所をエリア分けするなど、できるだけ利用者一人一人の安心と、活動の満足とを実現できるように工夫してきた。また、そのための職員同士の声の掛け合いや情報共有が重要になっている。

身の回りのことだけでなく、おやつ準備を仲間と協力して行うなど、できるだけ自分たちの生活は自分たちで行っていけるようにしている。特に、夏休みなどの学校休業日の活動が、利用者の生活力を身に着ける機会となると共に、利用者一人一人が自信を積み重ねていく大事な機会となっていた。

・身体を育てる

身体の発達がゆっくりな利用者には、マッサージなどの取り組みを丁寧に行ってきた。また、リズムや集団遊び、散歩を定期的に行うことで、楽しみながら身体を動かす機会としてきた。

・創造的活動

定期的に制作活動を行ってきた。一人一人の発達に合わせて取り組み方を変え、ひとり一人の個性が表現できるように工夫をしてきた。今年度は、制作したものを“マルシェ”で作品展示として披露する場を設けた。

・クッキング

利用者みんなでクッキングを楽しむときと、ひとりひとりが主人公となれるよう個別や少人数でクッキングを行う時とをつくってきた。作ったものは、ステップの仲間だけでなく、恵の実っ子の仲間にもふるまうなど、いろんな仲間と「ありがとう」の気持ちのやりとりができる場としてきた。

・遊び

遊びの中で、試行錯誤する力や、仲間と関わり合う社会性の力が育っていく。発達がゆっくりでイメージがしにくく遊びが広がりにくい利用者に向けた支援グッズ作成にも力を入れてきた。

・体験活動

季節に合わせて、自然体験や楽しみとなる行事を企画して取り組んできた。今年度は、利用者一人一人の誕生日を大事にしようと、その子の誕生日には誕生日カードを作ってみんなでお祝いをした。小さな会ではあるが、ひとりひとりが主人公になれる大切な一日となっていた。

畑活動とアローカナの飼育に取り組んだ。畑活動では、草取りや石拾い、畝づくりなどの労働を利用者と一緒に行い、サツマイモや夏野菜の収穫をすることができた。アローカナの飼育では、利用者と一緒には餌やりやフンの掃除を毎日行い、アローカナの生んだ卵を採取してはクッキングで使用したり、利用者と一緒には販売をして、実体験を通してお金のやりとりを学んだり、いろんな人と関わり合う場の一つとしてきた。

・高学年活動

機会としては少なかったが、5、6年生の高学年をリーダーとして、司会をしたり、話し合いの場を持つ機会をつくってきた。そうした機会を通して、高学年としての“誇り”や“自信”を感じる場となっていた。

・恵の実っ子の仲間と“共に育つ”

ステップくんの仲間同士だからこそ育つもの、また恵の実っ子との仲間の中でこそ育つもの、それぞれを大事にしていきたいと考え、活動の工夫を行ってきた。恵の実っ子の仲間がステップくんの仲間のことを考え行事を企画してくれることもあった。

・保護者支援

茶話会を、定期的（1回／1～2か月程度）に行ってきた。人数も多い為、支援学校に通っている児童のグループと、地域の学校に通っている児童のグループの2つに分けて茶話会を行っているが、年に2回は全員合同の茶話会を行ってきた。秋にはOBの保護者を招いての茶話会を行った。

(安全管理)

- ・火災、竜巻、地震等を想定した避難訓練を保育園やホップくんが行うのに合わせて実施。実働に合わせて、他事業所と協力し合って、災害対策ができるよう、法人としての消防組織を設置している。
- ・ステップくん単独でも、地震、竜巻、火災を想定した避難訓練を行なった。
- ・災害に対する避難訓練だけでなく、誤嚥、溺水、見失いに対する緊急時対応訓練も行った。

6 職員の処遇について

(会議)

- ・事業所内の職員会議を月に2～3回程度実施している。参加できない職員もいるので、記録を残し情報共有ができるようにしている。
- ・毎日、開所前に職員が集まって、その日の活動予定や周知事項等について打ち合わせをする時間を確保している。
- ・法人全体の職員会議を月に1～2回実施してきたが、労務改善もあり、10月より法人全体で行う職員会議は行わず、法人全体の周知事項は各事業所で行う職員会議内で周知していくこととなった。
- ・ホップステップ会議を行い、福祉事業所として共有が必要な内容について共有、検討し合ってきた。
- ・虐待防止及び身体拘束適正化委員会を設置し、必要な体制整備や指針等の整備を行った。

(労務管理)

- ・書類作成を勤務時間内に行えるよう、職員間で連携をとり対応している。
- ・日常の労務や療育に対する困り感を職員が抱え込んでしまわない様、会議等で個々の療育等について話し合う時間を確保している。また、職員個々に聞き取ることも大事にしつつ、職員間の風通しが良くなる様、努めている。
- ・キャリアデザインシートを配布し、職員の次年度への要望や、現在の働き方等に関する意見等を記入してもらった。必要に応じて、職員の個別面談も行った。

(研修)

事業所内研修

- ・虐待防止対策
- ・気道異物除去の実技演習
- ・水、山の安全学習
- ・スマホ・ゲーム・ネット依存の予防

事業所外研修

- ・東海地区職員学習会
- ・女の子の発達障害
- ・自閉スペクトラム症診断と支援の新しい潮流について
- ・からだの発達を現場に生かそう
- ・東三河子どもの発達を考える会
- ・サポートファイル活用教室
- ・愛知県障害者虐待防止・権利擁護研修
- ・障害基礎講座
- ・気になるこどもの保護者を関わるポイント
- ・障害福祉従事者初任者研修

資質向上計画を作成し、年度末には各職員に資質向上における振り返りを実施。次年度の目標につなげている。

7 施設管理

- ・ログハウス裏の畑を借りることができ、療育の一環として畑活動に取り組み始めた。
- ・7月ににわとり（アローカナ）が7羽増え、全部で9羽のにわとりを飼育することとなった。新たににわとり小屋を設置。
- ・事務所前の地面に直径10センチほどの穴が開いた。地面の下に水が通る道ができてしまい、それが原因で起こる陥没穴であった。事務所周辺の地面の下を調査し修繕を行った。
- ・定期的に環境整備の時間を設け、草とり、園庭整備等を行ってきた。
- ・季節に合わせて、施設内の装飾を行うと共に、利用者の作品を定期的に展示し、明るい雰囲気づくりに努めてきた。

8 地域社会との連携

- ・去年に引き続き、放課後デイサービス共有会議への参加をしていく予定であったが、新型コロナウイルスの影響で実施されていない。今後、開催の見通しが立てば、参加していく予定である。
- ・白川を愛する会の草とりへ、児童、保護者と一緒に参加をした。
- ・紡ぐ輪が運営するマルシェに、ステップとして出店をし、作品展示と共に利用者が接待をする喫茶店活動を行った。

9 ヒヤリハット・事故報告

ヒヤリハット： 11 件

事故報告： 0 件

ヒヤリハットとして上がる前段階の、気になる事柄を職員間で共有し合うようにしている。

10 苦情報告

特になし

11 状況と分析（今後へ向けて）

- ・定員を 20 名に増やして 2 年目となるが、利用者の登録者数も増え、実績は上がっている。その分、年齢も抱えている障がいも、家庭環境や保護者の悩み等も多様化している。利用者一人一人の安心を作っていくためにも、活動場所の住みわけが必要になっており、限られた空間をどのように使い分けていくのか、限られた職員の中で活動をどのように展開していくのか、工夫や職員間の連携が重要になっている。また、次年度は定員を満たす状態に近づいていくが、今後は定員を超える利用希望者が出た場合の対策の検討が必要になってくる。
- ・“共に育つ”ことを理念としているが、恵の実っ子クラブの仲間と共に過ごす時間自体は少なくなっている現状がある。しかし、これまで共に過ごしてきた土台があるからこそ、“一緒に活動する”となれば自然と関わり合い、お互いを思い合える関わりができる。ステップの仲間同士だからこそ育つ部分もあるが、恵の実っ子の仲間と過ごす時間を求めている子どもたちの姿もある。一緒に同じ活動をして“共に育つ”ことを目指すだけでなく、お互いがお互いの価値を感じ合えるような“共に育つ”ということはどう目指していけるのか、今後も職員と保護者と共に考え合っていきたい。
- ・保護者支援として、保護者との日常的な対話を大切にしているが、まずは、保護者の話を“聴く”ことを心がけ、子育ての大変さを共有してきた。また、定期的に茶話会を行ってきた。下半期にはOBの先輩母さんを招いての茶話会を開催したのがとてもよかった。次年度も、開催予定である。
- ・地域の学校に通う利用者の中で、学校での大変さを抱える利用者が増えている。学校や相談支援事業所、保育所等訪問支援等と連携をして、事業所としてできる本人の学校支援を行っていく。
- ・職員一人一人の得意分野を活かして連携し合うことで、利用者にとって必要な活動がうまく展開されてきていると感じる。次年度は、会議の運営を整理し、さらに職員間での情報共有がしっかりできる体制をとるとともに、職員一人一人が自分の役割を意識することで、それぞれの得意分野がさらに生かされるようにしていく。
- ・11月に紡ぐ輪主催のマルシェが開催され、ステップとして利用者の作品展示とともに喫茶店の出店を行った。利用者がいろんな人と関わる機会になり、また将来の可能性にもつながる活動になっていた

と感じる。次年度も、マルシェを一つの目標にして、作品制作等を行っていく。

- 下半期は、虐待防止及び身体拘束適正化委員会の運営に着手することができ、指針等も整備することができた。次年度、新たに整備が必要な委員会等もあるため、ホップステップ会議を開催し、準備を進めていく。
- 虐待防止関係の整備について、他事業所を訪問して情報収集を行った。その際、ヒヤリハットや安全管理等の取り組みの工夫を教えていただき、事業所でも取り入れて実施することでよい結果を得ている。改めて、他事業所との情報共有や連携が重要であることを感じ、今後も他事業所から学ぶ機会を得ていきたいと考えている。
- 次年度は、新たに中学生の受け入れが始まる。これまでの恵の実っ子との交流も生かしながら、新たに中学生として大事にしていく活動内容を、職員間で検討しながら取り組んでいく。
- 利用者の年齢が上がるにつれて、事業所内の設備が利用者の身体に合わなくなっているところがある。それらについては、設備改善を検討していく。また、中学生の居場所作りや、更衣室の設置等を工夫して行う。
- 18歳以降の障がいを持つ方の「共に生きる居場所づくり」に向けて、地域福祉のニーズを調査し、また他の事業所見学を行いながら、具体的に事業内容の検討を行っていく。